氏　名（本籍）	會田　宏（東京都）
学位の種類	博　士（コーチング学）
学位記番号	博　乙　第　2598　号
学位授与年月日	平成24年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	**球技の個人戦術における実践知の構造に関する研究** －ハンドボールの事例を中心にして－

主　査	筑波大学教授	博士（体育科学）	朝岡正雄
副　査	筑波大学教授	博士（体育科学）	中川　昭
副　査	筑波大学准教授	博士（コーチング学）	中山雅雄
副　査	筑波大学准教授	博士（体育科学）	木塚朝博

論文の内容の要旨

（目的）

球技において長期的な視点のもとで選手指導を行うには、当該種目の選手にどのような能力が求められるのかを明らかにしておく必要がある。この問題に関連して、とくに戦術力の指導では、卓越した選手の経験に基づく個人戦術に関する実践知を明らかにすることが求められる。しかし、これまでの球技における戦術研究は、戦術思考力と技術力を別々に取り上げてきたために、ゲーム場面において発揮される個人戦術の実践知の構造を明らかにするには至っていない。本研究の目的は、ハンドボール選手を事例として、球技において個人戦術の達成力を規定している実践知の構造を明らかにすることにある。本研究によって、球技の指導における個人の競技力向上への寄与が期待される。

（対象と方法）

研究の目的を達成するために、本研究は以下の4つの研究から構成されている。

研究1：文献踏査を通して球技の個人戦術に関する先行研究の問題点を明らかにする。

研究2：実践知とみなされる、個人戦術力を構成している個々の能力を把握するための方法を開発し、その有効性を検証する。

研究3：研究2で開発された方法を用いて、国際レベルのハンドボール選手を対象に、個人戦術力に関わる実践知の構造を明らかにする。

研究4：同様の方法を用いて、国際レベルで活躍したハンドボール選手の実践知の形成過程を縦断的に調査し、個人戦術達成力の形成過程における実践知の発生様相を明らかにする。

（結果と考察）

研究1：ここでは、個人戦術に関する実践知の構造を明らかにするには、個人戦術力を客観的に対象化してとらえる方法ではなく、それを行為者の視点からとらえ直す質的研究の方法を用いることが不可欠であることが明らかにされた。

研究2：ここでは、運動者の動きのコツに関する語り（内省）を通してコツ身体知とカン身体知を外化する

ために、調査者と調査対象者が語りを共同産出していく新たな方法が開発された。また、本研究では、この方法によって外化された語りの内容にメンバー・チェックをかけることによって行為者の視点を保持したまま間主観性を保持しうることが確かめられ、このことを通して本研究で開発された方法が実践現場に有効な知見を提供しうることが検証された。

研究3：ここでは、国際レベルの3名のハンドボール選手の動きのコツに関する語りを横断的に分析することによって、このレベルの選手の個人戦術力は、知覚・認知的な情報処理に基づいて、選択された動きを実行する能力ではなく、対峙する選手と相互主体的な関係を結び、間主観的に相手選手と対話しながら行為の中で知を働かせ、その行為自体を変化させていくことができる前意識的な能力であることが明らかにされた。

研究4：ここでは、国際レベルで活躍したハンドボール選手1名の動きのコツの獲得過程に関する語りを縦断的に分析することによって、動きのコツは、コツとの出会い、コツの理解、コツの消失、コツの獲得という過程を通してきわめて高い形成位相に到達しうることが明らかにされた。

審査の結果の要旨

本研究は、運動者自身のコツに関する語りから選手のもっている個人戦術に関わる実践知の内容を読み解く方法を開発したきわめてオリジナリティの高い研究と評価できる。さらに、独自に開発したコツに関する語りを読み解く方法を用いて、国際レベルのハンドボール選手の個人戦術力を構成している実践知の構造と発生過程を明らかにした。これらの考察結果からは、球技選手の戦術力を向上させるには、戦術トレーニングのみならず、技術トレーニングでも、対峙する相手選手と相互主体的関係を結んで身体的に対話する能力を身につけさせることが何よりも重要であるという示唆が提供される。

平成23年12月29日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

なお、学力の確認は、人間総合科学研究科学位論文審査等実施細則第11条を適用し免除とした。

よって、會田　宏氏は博士（コーチング学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。